第 16 回ヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展
日本館キュレーター　指名コンペティション　応募案

全体テーマ：　**Freespace**

日本館テーマ：　**Freespace/「起こり」の場所 / ヴェネチアの空中井戸広場**

はじめに

私たちは、まず「Freespace」という全体テーマに賛同し、現代社会において自由な空間というものがいかに創造可能かを提案したいと考え、生存環境条件から構築される文明的な建築を主題に据えました。
これはヴェネチアの環境と日本の環境を同じ地平で考えることを可能にする概念だと考えます。そこから導き出されたテーマが「水」です。水を共有する空間＝場所は、自由や平等を象徴する空間＝場所でもあり、私たちはそれをヴェネチアの環境に日本の技術を重ね合わせることで表現しようと試みました。
以下にそのコンセプトを記します。

自由な空間

全体テーマである「Freespace」とは、今日、全世界的な課題であると私たちは考える。世界が不寛容になりつつあると感じているからである。もちろん日本も例外ではない。
現代の都市計画や建築は、いつしか近代黎明期の民主的な理想から変質し、合目的的でないものに対して不寛容になった。たとえば、公共空間では増え続ける禁止事項によって私たちの活動は制限され、想定された目的の内でのみ行われるように制御され、それらから外れた活動は非社会的とさえ中傷される。
加えて高度経済成長から一億総中流へという成功神話のもとに、民主的な社会の成熟を蔑ろにしてきた資本主義の流れは、成長の鈍化を経て新自由主義から市場原理主義へと変質して搾取の牙を剥き、今や人間の尊厳さえ市場に晒そうとしている。
こうした日本の状況に対する閉塞感とその乗り越えは、前回の「縁」で示された。若者たちが既存の文脈を大胆に読み替えていく試みが数多く紹介され、それらの集合体としてメッセージたらんと意図されていた。「縁」とは、そこに生じたアクティビティの総称であった。ただそれらは、個々人の高いリテラシーとハイコンテクストな共同体に依存しており、建築造形の閉塞感という課題さえも圧倒的なアクティビティで包み込んだ。いわばアクティビティによるデザインの先送りである。
一方で社会は遷移し続け、その過程で想定された枠に収まらない人間を生み出し続ける。その人間たちを天才と呼ぶか変人と呼ぶか、革命家と呼ぶかテロリストと呼ぶかは、その時々の共同体の許容力に委ねられている。しかし昨今の排他的思想や post truth 現象などを見るにつけ、その許容力を盲信する気持ちにはなれない。
ゆえに合目的的な空間でもなく、共同体的な空間でもなく、根源的に自由な空間あるいは場についての問題提起が生じるのは時代の必定であると理解した。そこで私たちは、人類の歩んできた文明を見据え、自由な空間について再考し提示する必要があると考えた。

文明的であること

ヴェネチアと日本、この両者を架橋する論理を組み立てる上で私たちは、「文明的な建築」について思考した。文明的であることとは、生存環境条件を把握するということである。科学や技術や知識はそのための手段である。その視点に立てば、ヴェネチアもマチュピチュも棚田も同列に論ずることができる。
人間が居を構えたり、生活を営む場所は、必ずしも約束された環境ではない。むしろ逆境に対して覚悟を決めて「起こり」の場所を定めるのだ。その決定に際して人間は文明的な判断をする。つまり、水利、日射、通風、土質、防衛、交通、といった生存環境条件に基づく判断である。ゆえに文明は文化に先行すると考える。
ヴェネチアも、湾の中の潟に追い込まれて住み始めた人たちによってつくられた都市である。やむを得ない選択がこの地に生きるための知恵を発動し、自然環境との調停がこの都市の現在のかたちを規定した。言い換えれば、生存環境条件を定めた上で社会的な決めごとを発動させ、都市環境が形成された。海上都市だから、日射、通風、水運、防衛には適しているが水はどうか。水は人間の生活環境条件にとって最上位のものゆえ、その確保は重要な課題である。彼らはそれをどうしたか。

ヴェネチアと水と都市構造

ヴェネチアの街には中央に井戸を配した小さな広場あるいは中庭などが点在している。これらの井戸と広場は、広場に集まった雨水を浸透・濾過しながら中央に集め、生活用水を得るための一体化した装置である。巨大な水道橋によって遠方より奪取してきたものではなく、この地の誰にも平等に降り注ぐ雨を公共の場において集め、濾過して得たものである。人類のもっとも重要な生存環境条件のひとつである水の取得・分配装置が都市構造を決定している。ヴェネチアの文明的叡智のひとつがこの井戸にある。
そこで私たちは、日本館の敷地をビエンナーレ会場というひとつの都市空間の中の「Freespace ＝井戸のある広場」に見立て、誰もがいつでも水を得ることができる場にすることを考えた。日本館は集水装置＝井戸となる。

三分一博志の設計思想

その日本館を「起こり」の場所として建築家・三分一博志がデザインする。三分一は、水や空気を「動く素材」（動く建材）と考える建築家である。彼の設計思想、つまり建築形態を環境から立ち上げる設計思想は、文明的でありかつ 21 世紀において世界で共有され得るものと考えた。豊かな環境資源国である日本から発信していくにもふさわしい。
三分一は、日本館の外部に茅葺き屋根の原理を用いた集水装置を設け、集めた水を内部に取り入れて炭を使った棚田状の濾過装置を通して人々に提供する。その最終的な形状はヴェネチアの降雨条件など科学的なリサーチを経て決められるだろう。
三分一は、「犬島精錬所美術館」や「おりづるタワー」に見られるように、環境条件自体を設計の対象としてきた。今回彼は、吉阪隆正が設計した日本館において、水の生成システムを通じて自由な空間の初源と向き合う。

Freespace としての空中井戸広場

三分一の建築が生み出す清らかな水を、人々が飲んだり、手を洗ったり、眺めながらくつろいだり、ときに少し浴びてみたりしたくなるような、開かれた場のための小さな装置を用意したい。
それを気鋭の若手建築家・大室佑介が担当する。大室は建築の幾何学的な形態が持つ可能性を追究し、厳密な形式が建築を解放することを夢見ている建築家である。三分一とは一見対極的な思想のように見えるが、彼らには人類が共有し得る文明としての建築に対する共感が通底している。
そこで大室には、同じく水の誕生に向き合い、その平和的な共有と分配の喜びを分かち合うことのできる装置＝場の創造を委ねた。これも建築の初源のひとつと考える。

ヴェネチアという都市の本質である水の共有を、日本の素材や構法、技術、そして設計思想を用いて、誰もが自由に入ることができる井戸のある広場として構想する。
私たちが考える「Freespace」とは、文明的な建築という架け橋によって、ヴェネチアというかつて「起こった」場所に日本の建築技術や思想を重ね合わせ、新たな「起こり」の場所として創造されるものである。

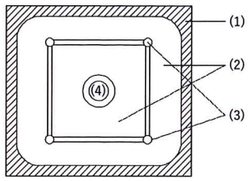
［提案者:橋本純 記］

イタリア

日本

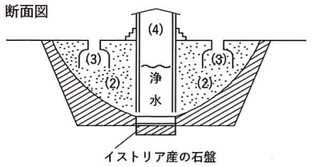
参照した文明

平面図



(1) 粘土層　(2) 砂の埋まっている部分
(3) 雨水の取り入れ口 (4) 浄水の汲みあげ口

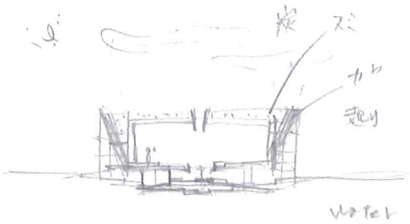
断面図



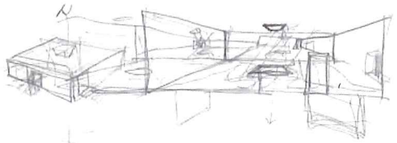
上／ヴェネチアの井戸広場と井戸の仕組み

水を集める仕組みとしての茅屋根と、炭による濾過システム、そして水流を調整するための棚田。

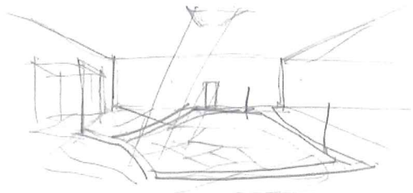
初期のイメージスケッチ



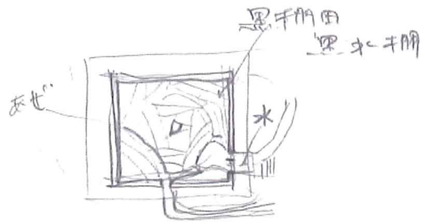
日本館を用いて水を集めて濾過し、訪れる人たちに提供するための建築、という基本コンセプト



内部空間のイメージ 1



内部空間のイメージ 2



プランのイメージ。水の流れを調整する炭を使った棚田の構想。

フォリーの初期イメージ。

展示空間のイメージ

右上／内部空間のイメージ。棚田状に起伏を設けた床を屋根で採集された水が時間をかけて中央に集まり、穴から下に落ちる。人々のための水が生まれる瞬間を祝福するフォリーが中央に用意される。

右中／外観のイメージ。建物に水を集めるための茅葺き屋根が、日本館に向けて勾配を取っている。下からは生み出された水が流れ出てくる。

右下／ピロティ下のイメージ。誕生した水を祝福し、共有するための場。そのための装置としてフォリーが用意される。

※フォリーの形状は、全体計画に連動して変更されるため、最終形ではありません。

キュレーター及び出展建築家プロフィル

キュレーター / 橋本純

出展建築家 / 三分一博志

出展建築家 / 大室佑介

橋本純（はしもと・じゅん）/Jun Hashimoto

編集者

1960 年　東京都生まれ
1983 年　早稲田大学理工学部建築学科卒業
1985 年　早稲田大学大学院理工学研究科建設工学専攻修士課程修了
1985 年　小野梓記念芸術賞受賞
1985 年　株式会社新建築社に入社、『住宅特集』、『新建築』、『JA』の編集長などを経て、2008 年より同社取締役
2015 年　株式会社新建築社を退社、株式会社ハシモトオフィスを設立。
2016 年　法政大学建築フォーラム 2016、モデレーター
現在、株式会社ハシモトオフィス代表取締役、株式会社新建築社社外取締役、東京理科大学非常勤講師

新建築社時代の主な仕事に、『現代建築の軌跡』(1995 年)、『日本の建築空間』など多数。
ハシモトオフィスでの主な刊行物に『織田邸 家具・生活・空間』がある。

建築・都市系のクリティークを主なフィールドとしつつ、冊子や出版物への寄稿、書籍の企画・出版、建築系ビジネスのコンサルティング、シンポジウムの企画・コーディネート、パネラー、まちづくりのコンサルティング、コンペのコーディネート、大学での講義など、徐々に業態が拡張しつつある。

大室佑介（おおむろ・ゆうすけ）/ Yusuke Omuro

建築家／私立大室美術館館長

1981 年　東京生まれ
2007 年　多摩美術大学大学院修了
　　磯崎新アトリエ勤務を経て大室佑介アトリエを設立
2010 年　AR award「百年の小屋」（東京都／埼玉県／大阪府）
2014 年より三重県津市の農村に移住し、東京と三重の二拠点生活を送りながら、縁のない三重の土地を故郷にするべく活動している
2015 年に、空地、空工場、空倉庫を利活用した美術館群「私立大室美術館」を開館し、館長に就任。年に数回のペースで企画展示を開催しており、来年には新館が開館予定。
2015 年　私立大室美術館　本館
2016 年　私立大室美術館　前室
2017 年　私立大室美術館　分館
その他、彫刻家・中谷ミチコとの協同作品「鳥の家」シリーズ、「HAUS」シリーズ、「RAUM」シリーズなどを展開

百年の小屋

私立大室美術館 本館（左：外観、右：内観）

私立大室美術館 分館外観

三分一博志（さんぶいち・ひろし）/ Hiroshi Sambuichi

建築家

1968 年　山口県生まれ
1992 年　東京理科大学工学部建築学科卒業
　　小川晋一アトリエを経て三分一博志建築設計事務所を設立
2003 年　「エアーハウス」（山口県）にて吉岡賞受賞
2011 年　「犬島精錬所美術館」（岡山県）にて日本建築大賞と日本建築学会賞作品賞を同時受賞
2017 年　「直島ホール」（香川県）日本建築学会賞作品賞を受賞

瀬戸内を活動の中心とし、いかにして建築が地球の一部になるかを一貫したテーマとした「地球のディテール」を提唱。2017 年の日本・デンマーク外交関係樹立 150 周年の親善大使。同記念関連事業としてデンマークで三分一博志建築展「水」The Water(Cisternerne)、「Hiroshi Sambuichi - Moving Materials　風・水・太陽 」(Danish Architecture Center) の 2 つの展覧会と金沢２１世紀美術館で日本デンマーク同時開催
現在、デンマーク王立芸術アカデミー教授（非常勤）
代表作は、前述の作品に加え、ふたつの世界遺産・宮島の弥山山頂における「宮島弥山展望台」（広島県）と原爆ドームに隣接する「おりづるタワー」（広島県）や瀬戸内海国立公園・六甲山における展望台「六甲枝垂れ」（兵庫県）、萩焼人間国宝　三輪休雪の窯元における「三輪窯」（山口）などがある。

システアナーネ『The Water』

犬島精錬所美術館

直島ホール

おりづるタワー

宮島弥山展望台

六甲枝垂れ

概算見積

項目	細目	単価	数量	計	合計
会場構成費	材料費			¥5,000,000	
	本体工事費			¥10,000,000	
	解体費			¥4,000,000	
	フォリー制作費			¥1,000,000	
					¥20,000,000
輸送費					¥2,000,000
保険料					¥600,000
現場監理運営費					¥10,000,000
カタログ制作費					¥1,600,000
広報費					¥1,600,000
関係者旅費	下見	¥250,000	3	¥750,000	
	リサーチ	¥300,000	2	¥600,000	
	設営・開会式	¥300,000	4	¥1,200,000	
	撤収	¥200,000	3	¥600,000	
					¥3,150,000
謝金	キュレーター	¥300,000	1	¥300,000	
	協力建築家	¥300,000	2	¥600,000	
					¥900,000
雑費					¥150,000
					¥40,000,000